

奈良県高山城の構造

千 田 嘉 博

一、大和国の中世城郭

奈良県内にはおよそ四〇〇カ所にもおよぶ城郭跡が知られている。奈良県の南半分は和歌山県へとつづく深い山岳森林地帯だから、国中を中心とする城郭の分布はきわめて濃密だといえる。奈良県の中世城郭跡の具体的な位置と現状は、一九七〇年代から八〇年代にかけて村田修三氏が精力的な踏査によって明らかにした(村田ほか編一九八〇)。

所在の有無や立地の確実な情報がないなかで、村田氏はそのほほすべての城跡をひとつひとつ歩き、縄張り図にまとめていった。その作業は膨大であり、足跡をたどることさえ容易ではない。文化庁の補助事業として各県教育委員会が実施している中世城郭の分布調査では、通常二〇名以上の研究者が調査に参画してようやく各県内の城郭の概要を明らかにしている。それを考えると、独力で奈良県内の城郭の全容を明らかにしていった強い意志と情熱には、驚かすにはいられない。

もちろん草深く埋もれた中世城郭を踏査して、ひとつひとつの姿を明らかにしていった城郭研究者はすでに一九七〇年代には各地で活動していた。そうした活動は民間学として独自の成果を上げた。そして民間学としての城郭研究は、

歴史研究や考古学研究に大きな影響を与え、研究のあり方そのものを広げていくことになった。

中世史の研究者として諸史料に精通した村田氏が現地に残跡として残された城郭跡を「史料」として研究を進めたことは、城郭研究の展開に大きな意味をもった。奈良県の城郭踏査にもとづく研究成果は、まず一九七九年の日本史研究会の大会報告「城跡調査と戦国史研究」(「日本史研究」第二二二号、一九八〇年に掲載)としてまとめられ、城跡から「地域史と在地構造分析」を読み解く、理論的支柱が示された。奈良県の村々に密着した小さな中世城郭は、学史的に重要な位置を占めるのである。

その後の城郭研究は、地表面観察の量的・質的拡大、発掘調査にもとづく考古学研究の展開と深化、研究方法の学際から学融合への展開、研究成果の共有化・市民との連携による整備と活用、地球規模での比較などへと広がってきた。城郭研究はミクロな領域にもグローバルな領域にも拡大したのである。

今日の城郭研究の課題は、(1) 地域の遺跡としての城郭群を的確に把握すること、(2) その変遷史として地域史を解明し、歴史研究に資すること、(3) 個別の城郭構造を考古学・文献史学・建築史学・歴史地理学・城郭研究等の学融合によって明らかにし持続可能なたちで整備することで、より文化的で優れた住環境を提供して地域社会の活性化を実現すること、(4) 日本列島の城

郭特性を東アジアおよび世界の城郭と比較・検討し地球規模の視野から評価することで、相互の特質を明らかにするとともに、各国の研究者と連携することで城郭構造の分析方法を深化させること、に集約される。

雑木に覆われた城跡を探索することからはじまった城郭研究も二〇年間で大きな変貌を遂げたわけだが、改めて歴史研究としての日本城郭研究の出発点となった奈良県の中世城郭をたどることに意味があると思われる。村田氏の奈良県内の踏査の多くは村田氏による城郭研究の初期に位置しており、個々の城跡把握と評価は今日の問題意識から再評価できるだろう。

奈良県内の城郭については村田氏の成果を引き継いで、多田暢久氏や藤岡英礼氏によって研究が重ねられている(多田一九九〇、藤岡二〇二二)。大和中世考古学研究会研究会・織豊期城郭研究会は二〇〇五年に「織豊系城郭の成立と大和」をテーマにしたシンポジウムを開催し、成果をまとめている(大和中世考古学研究会・織豊期城郭研究会編二〇〇六)。また宇陀市の松山城・沢城、郡山市の筒井城、天理市の龍王山城をはじめとして考古学的あるいは総合的な調査が行われ、新たな知見が得られている。そして葛城市歴史博物館は二〇〇五年に県内の中世城郭の研究成果を総覧する展覧会を開催した。

二〇〇六年には調査・研究の進展と歴史的価値の地域共有の成果として宇陀松山城が国史跡に指定された。また奈良大学では公開講座である二〇〇六年度の奈良文化論のテーマとして「大和の城」を取り上げるなど、個々の研究だけでなく具体的な保護と活用の動きも進展している。本稿は改めて奈良県の中世城郭をたどることで、城郭から考える歴史の原点を再確認していきたい。

なお今回の踏査は、二〇〇五年一月二十九日に生駒市教育委員会・生涯学習課の錦 好見氏・矢田直樹氏のご教示を得て、文化財学科の千田ゼミ(文化財学科三回生、小泉和也氏・小島靖彦氏・小林裕季氏)として縄張り図を作成した。その補足調査として筆者と千田高虎が二〇〇六年五月四日に再踏査を実施

した。縄張り図は最終的に生駒市教育委員会製作の高山城跡測量図をベスマップとして仕上げた。しかしこの測量図が大縮尺でそのままでは現地作業が困難であったため、踏査時は国土地理院発行の一・二五〇〇〇地形図を一・一〇〇〇まで拡大したものをベスマップとして図面を作成した。遺構の各部分の計測にはOniGIS社製レーザー距離計四〇〇LHを用いた。

また図面の浄書と仕上げは、今回すべてデジタル環境で行った。もはや目新しいことではないが、縄張り図の高度化・効率化を図る手段のひとつとして試みた。今後計画しているデジタル測量による縄張り図作成を念頭に置くと、図面のデジタル化が不可欠だからである。そこでベスマップにした測量図、マイラーベースに描いた縄張り図をそれぞれスキャナーでレイヤーとして読み取り、図面として合成した。従来のアナログ的な作業では、現地で作成した縄張り図もしくはベスマップの測量図のいずれか、あるいは両者をトレースする必要があった。

しかし今回は現地で作成した図面を基本的にそのまま仕上げの図面として用いた。それには現地でいいいに図面化することが不可欠となるが、筆者の場合、これまでも現地で図面をできる限り仕上げていたので特に問題はなかった。これまでの作業はデジタル化によって簡便に行うことができた。

ところが今回の浄書で支障になったのは、ベスマップにした測量図にあるさまざまな不要なデータを消していくことと、大縮尺の測量図をコピーで縮小したことによるベスマップの等高線のトビへの対処であった。

ベスマップの測量図には生駒市教育委員会によって曲輪ラインと切岸のケバが入れられていた。曲輪ラインの評価はいくつかの部分で筆者の評価と異なり、さらにその曲輪ラインとセットになったケバをそのままにすると、筆者の入れたケバと二重になって図面がかなり混乱したものになってしまう。そこでそれらをデジタルデータとして丹念に消去した。等高線を補う作業とともに多量の時間を費やすことになった。これらの作業にはペンタブレットを使用し



图1 奈良县高山城（千田嘉博作图）

た。

通常ベースにする図面には曲輪ラインやケバは入っていないので、それについて対処を求められたのは特異なことである。一般的な問題ではない。図面のかすれへの対処は、ベースにする図面の線のトビをあらかじめ厳密にチェックすることで、ほとんど防げるはずである。

一、城跡の立地と現状

高山城は標高二一七m、比高四〇mの丘陵上に占地した山城であった。南北に伸びた尾根筋に約二〇〇mにわたって主要な曲輪が連なっていた。高山城の東側の狭い谷筋には富雄川の上流・美の原川の分流が流れ、やや開けた西側の谷とともに現在では北の黒添池（くろんどいけ）へと続いている。高山城のすぐ西方は大阪府交野市に、北方は枚方市となっているように、この城は大和国と河内国との国境に位置し、両者を結ぶ街道を押さえた城であった。

また高山城の南方は富雄川に沿って次第に開けた谷筋となり、平群を超えて信貴山へと続いた。そうした立地は戦国期に城主の鷹山（高山）氏が信貴山城に拠った松永氏に帰属した要因となったであろう。

高山城の山麓には宅地が広がっているが、丘陵上にある主な遺構群は城内に建設された給水施設周辺を除いて良好に残る。給水施設の周辺は広く削平を受けており、遺構面が失われている恐れがある。建設当時は事前の調査等も行っていないようであり、その点は遺憾である。今後施設の改修等が実施されるときは、文化財保護の見地から適切な対応を望みたい。

二〇〇五年度に生駒市は高山城の丘陵にハイキング道の整備計画を進めた。道筋を整備することで高山城を多くの市民が気軽に訪ねられるようになることは、たいへんよろこばしい。しかし往々にして園路の設置が城郭遺構を破壊し

てしまうことは残念なことである。生駒市教育委員会はこの工事計画に先立って詳細な測量図を制作するとともに遺構の観察を行い、ハイキング道計画と文化財保護との調整に努めた。

その結果、ハイキング道は高山城の遺構を避けるよう計画されることになった。その後、ハイキング道は二〇〇六年五月に正式に供用を開始した。工事後に再度実施した踏査でハイキング道は主要遺構を破壊していないことと、教育委員会が高山城の簡便な解説板を設置したことを確認した。生駒市教育委員会の適切な対応は高く評価される。

ただしハイキング道が高山城の主要部を避けたことは、ハイキング道を歩いただけでは高山城の実像を体感できないことを意味する。一部の曲輪を経由するものの、正確なイメージが伝わらない恐れがある。また城郭内の園路は整備していないので、雑木林をかき分けて歩くしかないが、多くの人が切岸を直登するなどしては遺構を痛めることになる。整備を行ったハイキング道に加えて、今後、城跡を見学する動線（園路）をどのように整備していくかは、高山市教育委員会に残された課題である。

三、高山城の城郭構造

高山城は大きく分けて三つの部分から構成されていた。まず標高二一七mの最高所を占めた曲輪1を中心とした中心曲輪群、つぎに九頭龍王を祀り十三重塔がある曲輪2、最後に曲輪2の南に位置した曲輪3の各部分である（図1）。個々の特徴を見ていこう。

中心曲輪群1 城内の最高所を含む曲輪群で、多数の曲輪から構成された。とりわけ1とした曲輪は高山城全体の主郭と評価される。曲輪1の北側には低い土塁が見られ、尾根筋の鞍部と曲輪とを区分していた。鞍部に下っていく尾根

筋は狭いやせ尾根で尾根筋の両脇には複雑な凹凸が認められるが、人工的な遺構ではなく自然地形と評価すべきである。曲輪1北側の鞍部は、三〇m北側でゆるやかな登りに転じるが、その最も低くなったところを堀切りと評価するか否かが大きな問題である。

村田修三氏は「堀切りはない」と判断された(村田一九八〇…三二一—三二二)。しかし子細に検討すると、やはり鞍部がわずかに人工的に堀窪められたと評価すべきだと判断された(図1—a)。しかし中世城郭の堀切りとしてはひじょうに軽微なもので、全国的に見ても、また県内の事例と比較しても、もっと明確な堀切りであつてもおかしくない。地形的に絶壁や崖になつていてわけではなかつたから、この点は高山城の大きな特色である。

しかし高山城は城域北側の尾根筋に対しての守りを意識しなかつたわけではなかつた。曲輪1の東側に位置した曲輪iの北端には、鞍部側からの侵入に備えた土塁が明確に残る。この曲輪i北側の土塁位置は、曲輪1北端の土塁と同じライン上になるようにくふうしており、個々の曲輪を越えた計画的な普請が認められるからである。

明確な堀切りを施さなかつたことは、中心曲輪群南側の鞍部b、曲輪3まわりの尾根とも共通した。中心曲輪群と曲輪2との間の鞍部であるbも堀切りを入れてしかるべき場所であつた。しかし自然地形として緩やかに下りまた登るといった状況で、特段の工事をした痕跡がない。西側斜面は堅堀状の窪地となり、それは山麓までつづく。これを単体として見れば遺構と判断することも可能である。ただし尾根筋をそのままにしながら斜面だけ堅堀で守つたというのは合理的でない。

こうした状況と曲輪2の南側が断崖状の切岸になつていたことを考え合わせると、中心曲輪群と曲輪2との間はそれほど遮断を意識せずに使用していたと評価すべきである。もちろん曲輪2は中心曲輪群に向けて防御の切岸を施して

いたので相対的な自立度は高く、曲輪としての完結性も認められるが、中心曲輪群の南側への守りを固めた要害機能を担つた分析される。そう考えると、周囲を曲輪に囲まれた谷部の曲輪jなどは曲輪2によつて守られることではじめて曲輪として成立しており、整合的に全体を解釈できる。

曲輪1はよく削平されており、西側は曲輪f、東側は曲輪eと切岸を施した段差でつづいていて、東西四〇m、南北二〇mほどの広さで、一定の建物を建てることも可能である。出入り口は明確ではない。曲輪1の南西端には大きな窪みがあり、ある時期の水溜かと思われる。直接、城に関わる遺構かは地表面観察だけでは判断できない。もし城郭に関わる遺構とすれば井戸跡であろうか。

曲輪eは周囲の切岸はよく整つていたが、曲輪面に自然地形の傾斜を残していた。ゆるやかな傾斜であるので実用上は大きな支障ではないとはいへ、城郭としての主要部に自然地形の傾斜を残すのは奇異である。曲輪e先端のgは、先にも記したように給水施設で曲輪面が削平され破壊されている。gの南側には出入り口の跡があるが、工事との関係で本来の形態を保つたものか判断が難しい。位置的にはあるべき場所であり、改変を受けているにせよもとの高山城の出入り口も基本的には現状のような単純な坂虎口であつたと思われる。

曲輪fは東西に長く伸びた曲輪で途中にわずかな段差をもつ。東側の斜面に一段下の帯曲輪から出入りした斜路の痕跡があるが、これも本来のものであるかは確かではない。曲輪fの北西には曲輪1からつづく低い土塁があつた。全体に曲輪面の削平はたいへんいいねいであつた。曲輪hは曲輪1・曲輪e・曲輪fなどに囲まれた立地で、広い帯曲輪であつた。hの部分は周囲に畑の溝がめぐっているのが観察され、現在は放棄されているが比較的近年まで畑として使用されたことが明らかである。

曲輪2 曲輪2には現在、九頭龍王が祀られている。二〇〇六年五月段階では高山市によるハイキング道の終点である。九頭龍王を祀る石組みの基壇によつ

て曲輪面の大半は覆われており、本来の形状はよく分からない。ただし曲輪の南西部をはじめとした南側斜面は断崖状の急傾斜になっており、ひじょうに要害性が高かったことがわかる。北側と南側に山道の取りつきがあるが、もともとの出入り口であるかは確実ではない。しかしほかの部分に出入り口を想定しにくく、城郭としての出入り口も現況道の取りつき部分にあった蓋然性が高い。そうした想定が正しければ、曲輪2の出入り口も基本は単純な坂虎口であった。

曲輪3 曲輪2の南側は急な斜面を経た細長い鞍部となり、その尾根筋をゆるやかに登ったところが曲輪3となる。この曲輪3は村田氏は城郭に含めてよいか怪しいとされたところであるが(村田ほか編一九八〇…三三二)、遺構の観察から曲輪と判断した。

曲輪3の北側、東側には土塁がめぐる。曲輪面は南西に向かってゆるやかに傾斜しており、削平は完全ではない。曲輪3の西側は突出して櫓台状のkとなるが、その間をわずかに掘り窪めた痕跡がうかがえる。kのさらに先は複雑な尾根となっているが、これらも人工的な防御施設の痕跡ではなく自然地形である。

この曲輪3についても周囲の堀切りが明瞭でない点は一貫しており、奇異な感じを受ける。一見、主たる尾根筋にはcのところ鮮やかな堀切りがあるように思われるが、これは後世の切り通し道であり、そのまま堀切りと評価できない。もちろん、もともと堀切りがあり、その窪みを利用して切り通し道がつくられたと考える余地は残っている。

もうひとつの可能性はそれよりさらに南へ離れたdの部分を堀切りと捉えることである。dの北側には切岸と評価できる段差があり堀切りだった可能性がある。しかしdの南側は鞍部からつぎの頂部へと尾根が高まっていくところで、城外側から北に伸びた尾根筋は容易に見下ろされてしまった。こうした状況は

堀切りの位置としては不自然であり、dを堀切りと評価するには躊躇せざるを得ない。このように曲輪3は明らかに城郭化されてはいたものの、完全な形態とはいえないのである。

四、高山城の構造と歴史

高山城の城郭構造を見ていくと、ところどころに常設の城郭としては特異な構造が見えられた。このような城郭構造はどのような契機で形成されたのだろうか。「大乘院寺社雑事記」は一四九八年(明応七)八月、国中の有力国人であった古市氏が鷹山氏を頼って高山城に入城し、ここで体制を整えて出陣、秋篠氏や宝来衆と戦ったことを伝えている。同盟的な関係で結ばれた軍勢が高山城に入城したことがわかる。

城郭プランの全国的な検討から同盟的な軍勢による築城は、主郭を中心とした求心性の高い構造ではなく、それぞれの曲輪が分立的に集合した横並びの構造をとったことが明らかである(千田二〇〇〇)。明応七年の古市氏入城は、分立的な高山城の構造をつくる大きな契機になった可能性が高い。このときの入城は臨時の陣的な駐屯であり、守りの掘りを嚴重にめぐらす必然性は乏しかったと判断できるから、高山城が明瞭な堀切りを欠くことも符合する。

また鷹山氏は戦国期に河内衆を率いて大和の戦いに参陣したが、こうした軍勢の編成も多分に同盟的なものと考えられ、明応七年の契機だけでなく根源的に鷹山氏の権力構造が同盟的構造によって担われていたと推測される。つまり遺跡として残る高山城の城郭構造は、鷹山氏の権力構造を色濃く反映したものと読み取れるのである。

鷹山氏は戦国末期には松永久秀に属し、のち筒井氏に仕えたという。松永久秀は信貴山城を本拠にしており、平群谷を北上した先に高山城が位置したこと

を考えると、戦国末期に高山城のさらなる軍事施設化が進んでもおかしくなかった。しかし遺構から見る限り出入り口などに戦国末期の改修の痕跡は見られず、城郭施設としての進化は停止したようである。この点はやはり生駒市に所在する坂上氏の北田原城でも同じであり、一六世紀後半の城郭強化は抑制された可能性も考えられる。

この点は、古市氏・筒井氏・十市氏・越智氏などの有力国人の「山の城」による戦国期拠点城郭の成立、織田信長による大和の城破りなど、より大きな視点から評価しなくてはならない。これまで大和国における戦国・織豊期の城郭の選択と集住については十分な検討がされていない。高山城の最終段階の評価は、そうした諸問題を解く鍵のひとつといえるのである。

文献

千田嘉博 二〇〇〇『織豊系城郭の形成』東京大学出版会。

多田暢久 一九九〇『城郭分布と在地構造』『中世城郭研究論集』新人物往来社。

藤岡英礼 二〇〇二『中世後期における環濠集落の構造』『新視点中世城郭研究論集』新人物

往来社。

村田修三 一九八〇『城跡調査と戦国史研究』『日本史研究』第二二二号。

村田修三ほか編 一九八〇『日本城郭大系』第一〇巻、三重・奈良・和歌山、新人物往来社。

大和中世考古学研究会・織豊期城郭研究会編 二〇〇六『織豊系城郭の成立と大和』。

謝辞

高山城の踏査に当たっては、生駒市教育委員会・生涯学習課の錦好見氏・矢田直樹氏の指導を得た。厚く感謝申し上げます。